圧縮と移動：川端の作品における夢

Compression and Transference: The dream in works of Kawabata Yasunari.

メベッド・シェリフ
MEBED, Sharif

キーワード：川端康成、夢、フロイト、「弱き器」、「母国語の祈祷」
Key words：Kawabata Yasunari, Dreams, Freud, “The Weaker Vessel”, “Prayer in the Mother Tongue”

要約

川端康成の小説の中に日本の伝統的文化が現れる作品が少なくない。しかし、川端は近代の思想を無視していたというわけではない。たとえば、川端はフロイトの思想に触れるエッセイも書いていた。川端の作品にフロイトの影響が様々な形で現れる中で、本稿では夢の描写において、フロイトの思想を見ることができると指摘する。また、逆にその思想を用いて作品を分析することによって新たな解釈が可能であると指し示す。本稿で、「弱き器」と「母国語の祈祷」という初期の作品に出てくる夢の描写を取り上げ、その夢の描写の中にフロイトの夢の構造と夢作業の痕跡があることを論じる。こうした要素を指摘しながら、川端の作品とフロイトの思想との関係を明らかにしていく。

Abstract

Kawabata Yasunari’s fiction features a number of traditional cultural tropes. However, in no way did Kawabata ignore 20th century thinkers when he wrote. Most notably, he made reference to Freud in a number of his essays, and in looking at Kawabata’s fiction, one can find various examples of the effects of Freudian theory. The present research takes up two early works of the author, “The Weaker Vessel” and “Prayer in the Mother Tongue”. Within these works, the researcher points out that Freud’s ‘dream work’ plays an important role. By considering psychoanalytical aspects of the dream depiction within these two pieces, the present research attempts to clarify the relationship between Kawabata’s fiction and Freudian theory.

はじめに

本稿では20世紀の日本の文学に重大な役割を果たしていた川端康成が作品に登場人物の夢を用いて、意識下の世界を表現しようとしていたという手法に光を当ててみたいと思う。夢を中心に展開する初期の作品を取り上げて、その心理描写を考察する。そこで川端の作品における夢の描写が人物の内面、とりわけ、無意識を表現する機能を持っており、夢の描写にフロイトの思想を意識し、作品に取り入れたということを論じる。

川端の作品には夢を見る人物が多く登場する。また、夢や幻覚を扱う作品が少なくとも26編にものぼる[1]。夢の役割は作品によって異なるが、夢を見る登場人物の性格を描き出すだけのために用いられている例は少なくない。平山城児は『現代文学における古典の受容』で、川端の作品における夢の多くは、「現実に見る夢に極めて近い」ことと、作品に現われる夢が実際の夢と同じように「不条理」であると指摘している。さらに、「川端の作品の夢が作品大筋（ストーリー）に絡まって物語を発展させる役割を担っている場合は少ない」とも述べている[2]。平山は、川端の作品に出てくる夢に、精神分析の影響が見られると是認している一方、精神分析の理論よりも、日本の古典的な夢の見方の方が重要であると主張し、「ヨーロッパから渡ってきた精神分析とその他の文学的影響は皮層的な飾り」[3] に過ぎないと主張している。しかし、川端の特徴の一つは、古典的文学の要素と近代西洋文学、西洋思想の要素の融合にあると考えられ、「すべてかゼロか」という相互排他的な立論は妥当ではないと考えられる。逆にいくつかの要素の共存や絡み合いが川端の文芸のダイナミックを構成している。ここでは、川端がデビューした当時の作品に表れる夢の描写を分析し、フロイトの思想の影響を見てみる。そこで、フロイトが及ぼした影響と作品全体との関係を考察する。まず、川端がフロイトの夢判断の分析方法をどのように把握していたかということについて論じていくこととする。

「新進作家の新傾向解説」に見られる夢判断

フロイトの『夢判断』(Die Traumdeutung)[4] は20世紀において、最も重要な書籍の一つであり、精神分析の始まりとも言える。その中でフロイトは夢を通して、人間の無意識の内容を説くヒントを得られると論じている。評論家丸山圭三郎はフロイトの夢判断の重要性を次のように説明している。

> （西洋の思想では）「主体の意識を逃れるものを対象化することは不可能である」という考えが支配的であった…（省略）…ギリシャ古典期からヘーゲルに至る西洋形而上学の思考形式は、一貫してこの＜対象化思考様式＞であったのだから、意識野に現存しない＜無意識＞が学問の領域から閉め出されたのも当然と言わねばならないだろう。

これに対してフロイトがとった戦略は、そのままでは対象不可能と思われていた＜無意識＞を一つには神経症者の臨床分析から、二つには健常者の失錯行為や夢の解釈によってアプローチしようとするものであった[5]。

こうして、丸山はフロイトが夢の分析によって画期的なことをやり遂げたと述べている。本稿は、川端がそのフロイトの夢判断を踏まえて、作品中の夢の描写を用いて主人公の意識を逃れるものを表現しようとしていたことを明らかにしていきたい。まず、川端は若い頃からフロイトの思想に精通していたことを示す文章を取り上げたい。次の文章は川端が1924年（当時24歳）のときに書いたものである。

心理学説中でまだ年若い一派に「精神分析学」と云ふのがある。この派の学者は夢を分析するのに「自由連想」と云ふ方法を用ゐる。精神分析をここに紹介する必要はないが、この「自由連想」に就いて少し云ひたい。(A)この分析法を用ひる時に心理学者は患者、云ひ換へると被分析者を、安楽椅子に座らせたり、寝椅子に横たはらせたりする。つまり、体の筋肉が弛む楽な姿勢を取らせる。(B)それから、夢の一片、例へば患者の夢の中に蛇が現はれたのだとすると、その蛇に就いてその時心に浮かんでくるものを片つ端から、(C)できるだけ早く、何の秩序もなしに云わせる…（省略）精神分析学者は、このとりとめない自由連想に、心理洞察の鍵を見出した[6]。（下線は引用者による）

上記の引用では、川端が自由連想を通して夢を分析するという過程について記している。これを見るとこの評論を発表した1924年の時点で、川端の考えではフロイトの思想と夢との繋がりが根強いことが分かる。また無意識の内容を夢によって知る（川端のいう「心理洞察」））というフロイトの方法を熟知していたことも分かる。無論これはフロイトが『夢判断』で紹介した夢の解釈のテクニックであり、上記の引用に出てくる（A），（B），（C）はそれぞれ、フロイトの『夢判断』の第二章で紹介されている点とまったく同じである。ここで、フロイトの『夢判断』を見てみる。

…（夢の分析を行う前に、）患者の側に多少の心理的な準備がなければならない。つまり患者は第一に自分の心的知覚に対して注意力を緊張させ、第二に自分の脳裡に浮かぶ想念に対していつものように批判を加えることを全然中止しなければならない。[A]注意力を集中して自己観察を行うという目的のためには、患者が静かな場所にいて眼を閉じることが有利であり、また、[C]自分が知覚した想念形成に対する批判をやめてしまうということは医師の側から患者に手きびしく命令する必要がある。たとえばこんなふうにいってやるのである、精神分析が成功するかしないかは、あなたが自分の頭の中に浮かんだこといっさいを観察し

てこれを包みかくさずいってくれるかどうかに懸かっている。どうもこれはあまり重要でなさそうだからとか、今の問題とは無関係だからとかいうように考えて、ある想念を抑えつけて報告しなかったり、あんまり馬鹿げているからといってあることを報告しなかったりするというようなことがあってはならない。自分の頭に浮かんだことに対してはまったく公平でなければいけない。なぜかというと、もしわれわれの分析が不成功に終わるようなことがあったら、つまり夢や強迫観念その他を解消させることができなかったら、その原因はあなたが自分の頭に浮かんだいろいろの想いに加えたその批判にあるのかもしれないのだから、とこんなふうにいってやるのである[7]。

（省略）

〔B〕さてこの方法を実際に行ってみてまず教えられたことは、ひとつのまとまった全体としての夢ではなくて、夢の内容の個々の部分々々だけを注意力の対象にするのがいいということであった。まだ精神分析に慣らされていない患者に向かって、私が「あなたはこの夢に対してどういうことを思いつきますか」と質問すると、大概の場合患者は、自分の精神的視界の中に、あげ示すべき何物をも見出さないのがつねである。私が患者の夢を部分々々に砕いて示すと、患者はそれらのどの部分に対しても、それらの部分の「背後の考え」ともいうべき一聯の思いつきや考えを私に告げてくれる。さて、この第一の重要な条件においてすでに早くも、私のやる夢判断の方法は、古くから民間に行われている象徴による夢判断と袂を分かつのである[8]。

上記の引用において、A、B、C、という『夢判断』の第二章の三箇所は「新進作家の新傾向解説」と呼応している。川端が実際にフロイトの『夢判断』を読んだと証明する決定的な証拠はないが、「新進作家の新傾向解説」を書いた時点で、フロイトをこれほど詳しく紹介した日本語で書かれた文章は他になく[9]、英文の『夢判断』を読んだか、原書や欧州言語での訳書に詳しい人間の話を聞いた他に知る方法はなかったと思われる。また、先に引用した「新進作家の新傾向解説」は新感覚派時代の初めに現われた文芸評論の一つである[10]。そのため、フロイトの思想は日本において1930年以降に登場した「新心理主義」の独特な特徴・性質ではなく、既に新感覚派の一部であったように考えるべきである。その思想が川端の作品にどのような形跡を残していたかについて分析するために同じ時期に出た川端の作品に注目してみたい。

「弱き器」の夢

まず、「新進作家の新傾向解説」と同じ1924年に現われた「弱き器」を分析する。「弱き器」は雑誌『現代文芸』に発表された。作品は２ページにも及ばない短い「掌の小説」である。ここで作品全体を引用する。

「弱き器」

街の十字路に骨董店があつた。陶器の観世音の像が店と道路の境に立つてゐた。十二歳の少女の身丈を持つてゐる。電車が通ると店の硝子戸と一緒に観世音の冷たい肌も細かく顫へる。その像が道に倒れやしまいかと、私は前を過ぎる度に軽く神経を痛めた。―さうして見た夢。

観世音の体が真直ぐに私に向つて倒れかかつて来た。

長く豊かに垂れてゐた白い腕を、突然にゆうつと伸ばすと、私の首に抱きついた。無生物の腕だけが生物になつた無気味さと、陶器の冷たい肌触りとで、払ははつと飛びのいた。

音は聞こえずに、観音像が道路にこなごなに毀れてゐる。

と、そのかけらを彼女が拾つてゐる。

彼女が小さくしやがんで、きらきら散らばつた陶器のかけらを、いそがしげに拾ひ集めてゐる。

彼女の姿が現はれたのに驚いて、何か弁解がましい気持で口を開かうとすると、目がはつきり覚めた。

観世音が倒れてから一瞬間の出来事のやうに思へる。

私はこの夢に意味をつけて見た。

「爾等(なんちら)も妻をあつかふこと弱き器(うつは)の如くせよ。」

この聖書の言葉がその頃よく私の頭に浮かぶのであつた。「弱き器」といふ言葉から、私は何時も瀬戸物の器を連想してゐた。そして更に、彼女を連想した。

若い娘はまことに毀れ易い。恋をすると言ふことそれ自身が、一つの見方では、若い女が毀れることである。そんな風に私は考へてゐた。

――そして今私の夢の中で、彼女は彼女自身の毀れたかけらを、いそがしげに拾ひ集めてゐるのではなからうか[11]。

この作品は三つの部分に分けることができる。最初の３行は、登場人物が覚醒している間の経験である。次の９行は主人公(＝語り手)による夢の報告である。そして最後の８行は主人公の夢の分析である。ここで注目すべきことは、川端が描いた夢がフロイトの夢の理論に酷似していることである。まず、「弱き器」に出てくる夢の前に、夢の材料となる原体験が簡潔に描かれている。『夢判断』では、夢の材料は、数日前からその夜までの間の生活から組み合わされことが多いと書かれている[12]。また生活の片隅で瑣末(さまつ)的なものの例が圧倒的に多いとも述べられている[13]。

ここで夢を見た主人公による自己分析の部分に着目してみたい。主人公は、「夢に意味を付け

てみた」といって自己分析を始める。夢の意味とは、（未来の出来事を予測するための）日本の伝統的な夢占いとは異なり、主人公にとって夢は意識野以外の心の状態に関する情報を含んでいるものであるというように描かれている。また「弱き器」に出てくる夢で語り手は「連想」という言葉を用いている。フロイトの手法と同じように「連想」で夢の隠れた本当の意味を見ようとしていることは重要である。そして、ここで、顕在の夢、つまり眠っている人に見えてくる夢は、無意識の中に埋もれた願望の象徴であり、兆候（symptom）であるという考え方は作品に現われている。主人公は（自由）連想によって夢を解釈しようとしているだけではなく、フロイトが提唱している夢の構造も見ることができる。その夢の構造についてフロイトは次のように説明している。

> 夢の顕在内容ではなしに、夢の潜在内容からわれわれは夢の解釈を展開させたのであった。そこでわれわれはこれまでには存在しなかったひとつの新しい課題に直面する。すなわち、潜在内容に対する顕在内容の関係を探究し、かつ果たしていかなる過程を通じて潜在内容が顕在内容へと成り変わって行くかを跡づけるというのがその新しい課題である。
>
> 夢思想（潜在内容）Traumgedanken と夢内容（顕在内容）Trauminhalt とは、同一の内容の種類のちがった二つの国語でいい現わした二つの文章のごときものである。あるいはこういった方がいいかもしれない、夢内容（顕在内容）は、ある夢思想（潜在内容）を別の表現方法に翻訳したようなものであって、この別の表現方法の記号や組み立て法則を知ろうと思うならば、原典と翻訳と照らしあわせてみなければならない[14]。

このようにフロイトの夢に関する理論の中で、この二つの夢のテクストが大きな課題である。「弱き器」の主人公はこの夢の二重構造を意識しており、夢の顕在内容について考えることによって、夢の潜在的意味を見つけ出そうとしており、精神分析的視座が見られる。

主人公は自由連想を用いて夢の意味について考え、「爾等も妻をあつかふこと弱き器の如くせよ」という聖書[15]の言葉が主人公の頭に現われる。なぜ、仏教の菩薩像によって聖書の引用を思い浮かぶのだろうか。主人公はその関係を説明している。

> …この聖書の言葉がその頃よく私の頭に浮かぶのであつた。「弱き器」といふ言葉から、私は何時も瀬戸物の器を連想してゐた。そして更に、彼女を連想した。

作品中、主人公は、「連想」という言葉を二回使っている。その連想の中で、思い浮かんだ《弱き器》は、聖書の言葉の「妻」という言葉によって、主人公の「彼女」のことを表している。従って陶器の観音像は「彼女」との繋がりがあると考えられる。このように見ると、川端は「新

進作家の新傾向解説」で「例へば患者の夢の中に蛇が現はれるのだとすると、その蛇に就いてその時心に浮かんでくるものを片つ端から、できるだけ早く、何の秩序もなしに云わせる」[16] と述べているように自由連想を用いて夢の「意味」を明らかにしようとしている。「弱き器」の主人公はそのプロセスを経て、夢の潜在内容を見つけようとしている。これによって夢の潜在内容と顕在内容というフロイトが指摘した夢の構造がそのまま用いられているように思われる。

夢作業－圧縮

「弱き器」とフロイトの夢判断の思想の共通点は「連想」というキーワードだけではない。フロイトが『夢判断』で説明した夢の解釈のプロセスというものも川端の作品に現われているのである。フロイトによると、顕在の夢は、潜在内容（夢思想）をデフォルメしてできるものであるという。元の夢思想が顕在内容に「翻訳」される過程を夢作業と呼ぶ。また、フロイトは夢作業を巡って、「圧縮」、「移動」、「表現可能性への顧慮」という三種類を紹介している。

「圧縮」とは夢に出てくる一つのイメージの中で幾つかの概念が含まれているという現象である。よくある例は、夢に出てくる一人の人間が夢を見る人の複数の知り合いの特徴を現わすことである。「弱き器」に出てくる観世音の像に生きている片腕がある。その腕を主人公の首にかけようとする。つまり像は生きている人間の特徴である。また、その後、観世音は完全に「彼女」と化する。主人公の心の中では、陶器の観世音は同時に「彼女」でもあった。このように昼に見た仏像と「彼女」は夢の前半で観世音に圧縮され、後半で観世音が「彼女」のイメージに圧縮されている。夢の潜在内容には別々の人間であったが、二人とも顕在の夢では一つのイメージに圧縮されている。

このイメージの意味に注目していきたい。観世音は人間の苦しみの声を体で感じ、解脱を得させる美しい顔をした菩薩であり、川端の文学において重要なイメージである。人間の救済に勤める女性の仏という概念は、男が人間の女性の美しさによって救われるというモチーフの象徴であり、川端の初期・中期・後期の重要なテーマである[17]。「弱き器」の主人公もこの種類の主人公である。また、女性による救済というモチーフがより明らかな形で現われるのは、1960年に発表された『眠れる美女』である。その中で老人たちは秘密のクラブで薬によって眠らせられている美女と夜を過ごす設定である。そこで木賀という登場人物は、そのクラブで夜を過ごすことを「秘仏と寝るやうだ」[18] と語る。また、作品の後半には、語り手はこう述べる。

> …老人どもは羞恥を感じることもなく、自尊心を傷つけられることもない。まつたく自由に悔い、自由にかなしめる。して見れば「眠れる美女」は仏のやうなものではないか。そして生き身である。娘の若いはだやにほひは、さういふあはれな老人どもをゆるしなぐさめるやうのであらう。[19]

『眠れる美女』では、聖なるものと性的なものの混合というモチーフが最も明らかであるが、1924年の「弱き器」にその種が見られよう。川端の主人公の心の深いところで複数の女性のイメージが重なっており、それが憧れの的になっているように描かれている。たとえば、『みづうみ』や『住吉』連作という他の川端作品に出てくる主人公も、「弱き器」の主人公と同じように複数の女性のイメージを一人の女性に投影している。主人公がある女性に以前知っていた女性や自分の母のイメージを（無意識の中で）見つけ出そうとするこの川端のテーマの源流はフロイトの思想にあると考えられる。

夢作業その二「移動作用」

「弱き器」の主人公は自由連想を通して夢を分析し、夢の意味として女性の心は傷が付きやすいものであるという意味に辿りつく。主人公が正しく夢解釈を行ったとすれば、「彼女」は最も重要なイメージであるが、その彼女は夢の最も重要な出来事（観世音が倒れること）の後にしか現われてこない。すなわち、「弱き器」に出てくる（顕在の）夢では「彼女」が周辺的な存在である。この点でも夢作業の特徴が見られる。フロイトの夢作業では、無意識に存在する夢思想（潜在内容）の中心的テーマは、夢思想の中では周辺的な要素として現われることがあるという[20]。このようなデフォルメは「移動作用」という夢作業である。移動作用とは、夢に出てくる諸イメージの相互関係の歪曲である。夢の潜在内容において中心的なイメージや概念は、顕在の夢の中で、周辺的なイメージとして出てくる現象である。フロイトの思想との類似性もあり、川端がこの時期にフロイトの夢に関する思想に関心とそれについての知識を評論に示しているという二点から、「弱き器」に出てくる夢は、精神分析の夢に関する概念を用いて描いた可能性が高いと思われる。

フロイトの夢作業の点において、たとえ、川端がフロイトの『夢判断』を読んでいなかったとしても、顕在内容、潜在内容、圧縮の作用、移動の作用（転移作用）などの用語、内容はすべて、厨川百村の『苦悶の象徴』[21]（1921）で紹介されているものであり、川端がそれらの概念に触れているということは充分に考えられる。

「母国語の祈祷」の分析

次に、川端が1928年に発表した「母国語の祈祷」[22]（『文学倶楽部』）の考察に移る。現在、日本文学の研究において欧米で見られるフロイトの思想への関心はそれほど見当たらないが、かつて、日本でもフロイトの思想を文学研究に取り入れようという傾向が比較的に多かった。しかしそれらの多くは作品に現われる潜在する性的象徴を指摘するだけという研究であった。例えば、小林一郎が書いた論文「詩魂の源流」[23]では主人公が知らざる何者かに追いかけられているという夢が描かれている。彼は、逃げようとして、竹竿の上を歩いて、浴槽の中に隠れるという場面がある。浴槽に入った途端、元の交際相手が裸で彼を待っている。以下は小林の分析である。

…フロイドによれば、この様な部屋や風呂はすべて女性の性器であり、「長い竿」を伝わって内庭に下りたいという竹竿は男性器である。つまり男女の交りの不安定の中に、男が入り込んで来、しかも、その男からの手をかばってくれるのが一寸法師…[24]

小林によると、一見に性と無関係に思える竹竿のイメージは、実は性的な意味を持っている。かつて、「生活のほんの一部だと思われていた「性」」は、人間の心理において、密かに生活の中で最も重要なものであるというフロイトの考え方が見られる。しかし男根の象徴である「棒」や膣の象徴である「部屋」というのは、どの作品でも現れてくるものである。上記のようなイメージを見つけ出すという研究方法には疑問があり、作品の有意義な解釈にはならないだろう。このようなイメージ狩りだけでは、作品や文学の理解を深めたとも言えない。もう一つの問題は、小林の論文は、精神分析理論の誤解を孕んでいる。精神分析では、潜在的な夢思想に存在する諸概念とそれを表す顕在の夢に現われる諸イメージには、個人差があるとされている。夢を見る人によって、顕在の夢に出てくる同じイメージの意味は元の夢思想（潜在の夢）において異なるものなのである。その意味を理解するには、その人の生活や治療室の中で話される生活の内容と照らし合わせる必要がある。しかし、小林の研究では、それが一切考慮されていない。小林の理論は文学の研究者エリザベス・ライト（Elizabeth Wright）がいう「俗悪なフロイト的象徴」[25]の典型的な例である。

本稿では小林のアプローチとは別の方法で作品中の夢を考察する。ここで、「弱き器」の分析で注目した自由連想やフロイトの夢作業を視野に入れて、「母国語の祈祷」を考察する。それによって、フロイトの思想と川端の作品の生成との関係を明らかにする。まず「母国語の祈祷」は三つのセクションに分けることができる。第一のセクションで、主人公は一冊の言語学の本について考える場面がある。第二のセクションで、主人公が見る二つの夢が描かれている。第三のセクションで、夢を見た後、夢に出てきた主人公の元恋人がわざわざ主人公の住む町の海辺で別の男性と心中を遂げ、主人公が二人の遺体を見に行くというエピソードが描かれている。

最初のセクションで主人公が読む言語学の本では、生まれ故郷から離れて、外国で長く暮らす老人が死ぬ直前に母国語で喋り出したり、母国語で祈ったりする例が紹介されている。主人公はその話に感銘を受け、それについて彼の考えていることが描かれている。

…この老人達の多くは死の床に横たはつていよいよ息を引き取る時になると、埋もれてゐた記憶が遠くから帰つて来るのか、きまつて母国のスウエデン語で祈祷をする。

これは言葉の話である。――しかし、この奇怪な事実は何を語るか。

「そんなことは記憶の変態の一種に過ぎない。」心理学者はさう答へるだらう。

けれども感情家の彼(＝主人公)は、『母国語の祈祷』せずにはゐられない老人達を、甘い感情の腕で抱いてやりたくなる。

それなら言葉とは何か。符牒に過ぎない。母国語とはなにか。

「言葉の相違といふものは、実は野蛮人の間で他の種族に対して自分達の種族の秘密を隠すために発生したものだ。」

そんなことが書いてある本さへあるさうだ。してみると『母国語で祈祷』するのは、人間が古い因習に身動きならぬ程縛れながら、その縄を解かうとするどころか、その縄を杖柱として生きてゐる心持の一種ではないか。[26]

主人公の頭の中での＜母国語の祈祷＞という概念は、複数のイメージが重なって成り立ったものである。まず、主人公が読んでいる言語学の本に紹介されている老人はキリスト教徒であり、「祈祷」とはキリスト教の神への祈りのことを指している。キリスト教の世界で、「言葉」は（他の宗教でもそうであるように）神秘的な力を持つ。例えば、「創世記」で神は宇宙を言葉によって無から作り出したと記述されている。つまり、キリスト教では、言葉は宇宙より先に存在していたのである。さらに、『トテムとタブー』で、フロイトは原始人の世界に存在する「呪文」や「呪い」の概念が神への祈りというように形を変えて現代にも存続していると言っている[27]。このように＜母国語の祈祷＞というのは魔法的神秘的な意味も含まれていると考えられる。

それに加えて、「母国語」という単語に、「母」があることは偶然ではないだろう。育児が女性の責任であったという時代に、言語は母に教えてもらうものであった。そのようなことは主人公に「符牒」の意味があると考えることができる。すなわち、主人公にとって＜母国語の祈祷＞とは母に教えられる神秘的な秘密であると捉えられる。

第一セクションの最後に、若い頃に国から離れて長年外国で暮らして来た老人達が死ぬ直前に何十年もの間話していなかった母国語で喋り出すことや、祈ることが、主人公の頭の中で、人間が古い習慣によって束縛されるという思いに繋げられている。人間がそのような束縛から自由になろうとせず、逆にその鎖を強く求めようとする心理について主人公が連想する。

最後に主人公は「『自分にとつて、加代子が、この母国語のやうなものなのだらうか』」と述べる。加代子とは、主人公が数年前に別れた恋人であり、主人公が彼女に対する憧れをいまだに持っているように描かれている。

「母国語の祈祷」の第二のセクションでは、主人公は寝て、夢を見る。その夢には、大きなキリギリスが登場する。大きさは鳩と同じであると書かれており、川端はこのキリギリスの登場を次のように描いている。

…彼の頬に羽ばたきで付き纏わつて来た。音はない。しかし奇怪なことに、彼はその羽ばたきから高い道徳を感じた。密教の秘められた教へに触れる気持ちでその羽ばたきに触れた。つまり、鳩のやうなきりぎりすは真理の使徒であつた。[28]

第一のセクションでは、「母国語」は一種の秘密の暗号として形容され、上の引用では、「密教の秘められた教え」という形で、「暗号」のテーマと宗教のテーマが一緒になって再び登場する。最初のセクションに出てきた主人公の思いが横糸であるとすれば、第二セクションの夢の中に登場するイメージは縦糸で、昼と夜の両方の想念が網目のように織り込まれている。宗教というテーマは作品中著しく出現している。当時、川端は聖書に興味を示しており[29]、彼は、聖書において、キリギリスがバッタと同様、ユダヤ人を迫害するエジプトを裁くために送られるペストであるということをよく知っていたはずである。しかし、川端は巨大なキリギリスの大きさを表現するため、なぜ鳩と比べることにしたのであろうか。キリギリスは主人公にメッセージを運んでいるため、キリギリスと伝書バトという二つのイメージが重なっているのかもしれない。また更に、イエスの弟子を指す「使徒」という語が登場し、神の復讐、神の掟、神の言葉を運ぶ使徒、伝書バトというイメージは全て巨大キリギリスに圧縮されているようである。そしてキリギリスの運ぶ秘密の言葉は「加代子を捨てることが道徳的に正しい」ということである。キリギリスが神の復讐と同時に、主人公に道徳を押し付けているという宗教的な意味を持つイメージであると捉えるならば、主人公にとってキリギリスは精神分析における「超自我」の象徴であるという読み方ができる。

フロイトによると全ての夢の内容は夢主の無意識の願望を充足するものである[30]。川端がフロイトの夢に関する理論に基づいて夢を描き出したと仮定すると、この作品がフロイトの夢に関する思想の影響下にあると思わせる幾つかの理由が導き出される。まず、主人公は目が覚めて、「きりぎりすの羽ばたきがなぜ道徳の象徴なのか…」と自問しているが、夢に現われるものがその人の心に存在する想念の象徴であるという考え方はフロイトを思わせるものである。更に主人公は次のように考える。

「…その夢を分析出来るやうなきりぎりすの記憶はどこに埋もれてゐるのか思ひ出せなかつた」[31]（傍点は引用者による）

夢は何かの象徴であるという考えはフロイト以前にも存在していたが、ここでは、埋もれた記憶の象徴として現われており、フロイトの思想に似ていると思われる。また「夢を分析」するという言葉から見て、フロイトの影響は疑う余地がないだろう。しかし、主人公はすぐ夢の分析を

あきらめ、再び眠って別の夢を見る。

二番目の夢では、主人公が誰かに追いかけられており、逃げようとして、自分の先祖が住んでいた田舎町に入っていく。彼は叔父の家の部屋の中に隠れるが、そこはすぐ見つけられるだろうと思い、そこを出て、外で「一寸法師」に出会う。この「一寸法師」は主人公に風呂の中に隠れることを命じる。主人公はそれに従い、洋服を脱ぎ捨てて、湯槽に入ってみると、そこに元の恋人の加代子が裸のままで彼を待っている。そこで夢は終わる。

二番目の夢は別の夢ではなく、一番目の夢の続きとして考えられる。そうすると、夢の後半で主人公を追いかけているのは、超自我を象徴するキリギリスではないかと考えられる。超自我は主人公の本能的な願望を抑えるとフロイトは論じている。主人公は加代子の元に戻って性的関係を持ちたいと実は考えており、キリギリスはその願望を抑えようとしているように解釈できる。彼がどの状況で加代子を捨てたかということは描かれてはいないが、『雪国』や『伊豆の踊子』のような作品で見られるように、川端は身分の高い男性と身分の低い女性との結婚まで辿り付くことのない恋愛を描くことを好んでいたため、身分の高い女性と結婚するために主人公は加代子を捨てたのではないかと考えられる。つまり、キリギリスは主人公の本当の願望を抑えるために存在し、主人公はその束縛から逃げて、裸の加代子のそばへ走っていく。これは超自我から逃げて、自分の本能的な欲望を満たそうとする幻想であるというように解釈ができる。フロイトのいう「夢は全て願望充足」であるというテーゼに合致するように川端が作り出しているかのようである。

主人公にとって加代子は「古い因習」の象徴である。おそらく加代子は彼の初恋の人である。そして今彼は別の女性と結婚している。夢の中でどうしても古い因習に戻る本能的なものがあるように（川端によって）作り出されている。それを止めようとするのはキリギリスに象徴される文明の諸制度（社会、家族、宗教）である。また第一セクションでの、母国語で祈る外国の老人たちに対して、主人公に「甘い感情の腕で抱いてやりたくなる」という表現をさせており、原点に戻ろうとする人間の心理に同情していることを表そうとしているように考えられる。

ここで作品の底流に存在する「母」の問題に戻りたい。夢の中で、主人公はキリギリスから逃げて先祖の田舎町に戻った。このように主人公も原点に戻ろうとしている。一寸法師はその故郷で遊んでいた子供の時の自分の象徴であると捉えることができる。そして自分の最も居たい場所、すなわち、加代子のそばに行くことを命じるのが一寸法師である。また、加代子との裸の再会の場所は先祖の故郷の家の浴槽である。この場所は比喩的に、羊水の象徴であると考えられる。すなわち、先祖の家と母の体という類似性に加え、母の羊水と暖かい風呂との共通点が認められる。しかしそれだけではなく、川端が頻繁に利用する「意味の多重性」という工夫を表に出している。母国語、故郷、初恋、母という様々なイメージの連続はすべて加代子に圧縮されている。また母

と初恋という観念は『眠れる美女』にも見られるものである。主人公の江口は老人で、普通の女性との性的関係を持つことができない。彼は娼婦などをあきらめて、お金を払って薬で眠らされている裸の若い女性と夜を過ごすことにしている。そこで、彼は次のように考える。

> 「一生の最後の女か。なぜ、最後の女、などと、かりそめにしても……。」と江口老人は思つた。「それぢゃ、自分の最初の女は、だれだつたんだらうか。」老人の頭はだるいよりも、うつとりしてゐた。
>
> 最初の女は「母だ。」と江口老人にひらめいた。「母よりほかにはないぢやないか。」まつたく思ひもかけない答へが浮かび出た。…[32]

このように『眠れる美女』では、「母国語の祈祷」よりこの初恋＝母というモチーフが明確に現われている。川端は様々な作品で、母親に戻りたいという願望を持つ主人公を描き出している。「母国語の祈祷」もそのテーマが表面の下に密かに存在している作品である。

「母国語の祈祷」の第三セクションでは、主人公は加代子がわざわざ彼の住む町に行って他の男と心中を遂げるというニュースを聞く。加代子は死ぬ直前に自分の親戚へ手紙を出した。その手紙の発送先として主人公の家の住所が書かれていた。このように、彼女も彼に戻りたかったことがよく分かる。彼女にとって心中の相手は主人公の代替物であり彼女にもまた以前の状態に戻りたいという衝動が顕著であったのだろう。前の状態に戻るという衝動はフロイトの『快感原則の彼岸』で指摘される人間の精神生活の特徴である。精神分析からさまざまなヒントを得て作品を作ったと考えられる。

結論

本稿で見てきた２つの作品に、川端自身が関心を寄せていた精神分析の影響があったと考えられる。川端は、登場人物の夢を描写するだけではなく、主人公自身が見た夢を思い出し、その意味を考える場面も描き出している。川端は主人公の自由連想を通して表象しているという点において、この二つの作品は前衛的である。この手法によって川端は人物の夢を通して無意識の内容を表現できた。従来の文学で表現できなかった人間の無意識を描き出すことを高く評価すべきであろう。また、本稿で精神分析の文学研究は単なる作品に出てくるシンボルの解読手法ではなく、夢を理解するプロセスというように考えるべきである。川端が実際にフロイトの影響を受けていたかどうかとは別に、本稿で２つの作品を通して論じてきたようにフロイトの思想による川端文学の分析、作品中に出現する夢の描写をより詳しく解釈するための有力な手法になり得ることも指し示された。

1 羽鳥徹哉（編）（1998）『川端康成全作品研究事典』勉誠出版　（14頁）

2 平山城児（1992）『現代文学における古典の受容』有精堂出版（112頁）

3 同上（126頁）

4 Die Traumdeutung は1900年にウィーンで発表されて、1928年日本語に翻訳された。

5 丸山圭三郎（1990）『言葉・狂気・エロス』講談社　（83頁）

6 川端康成（1982）『川端康成全集第三十巻』、「新進作家の新傾向解説」新潮社（179－180頁）

7 フロイトＳ．（1968）『フロイト著作集第２巻』、「夢判断」人文書院（87－88頁）

8 同上（90頁）

9 フロイトの思想が日本に紹介された重要な文献は次のようなものである。医学の観点から森鴎外は「性欲雑説」という報告を『公衆医事』（明治35－６年）に連載していた。1912年に「物忘れの心理」というフロイトの思想に関する報告が『心理研究』に発表された。1917年に，高峰博は『夢学』（有文書店）でフロイトの夢に関する思想を簡単に紹介していた。1921年１月号の雑誌『改造』に 厨川白村は「苦闘の象徴」というエッセイで文学を意識してフロイトを紹介したのである。フロイトが書いた書物の和訳は1926年の安田徳太郎による『精神分析入門』が初めてであった。

10 昭和文学研究会（1979）『昭和文学の諸問題』、薬師寺章明「新感覚派の文学」（44－45頁）

11 川端康成（1980）『川端康成全集第１巻「弱き器」』新潮社（26－27頁）

12 フロイト（高橋義李訳）（1968）『フロイト著作集第二巻「夢判断」』人文書院（14頁）

13 同上（23頁）

14 同上（231頁）

15 ペテロの第一の手紙：３章－７は次のようである。「同じように，夫たちよ，知識に従って自分の妻と共に住みなさい。弱い器として，また命の恵みの共同相続人として，妻に敬意を払いなさい。あなた方の祈りが妨げられないためです。」

16 川端康成（1982）『川端康成全集三十巻』、「新進作家の新傾向解説」新潮社（179－180 頁）

17 鶴田欣也（1981）『川端康成の芸術―純粋と救済』明治書院

18 川端康成（1980）『川端康成全集第十八巻』、「眠れる美女」新潮社（145頁）

19 同上（191頁）

20 フロイトＳ．（1968）『フロイト著作集第２巻』「夢判断」』人文書院（257頁）

21 厨川百村（1921）「苦闘の象徴」、（『改造』１月号）（38－39頁）

22 川端康成（1981）『川端康成全集第一巻』、「母国語の祈祷」新潮社（222－229頁）

23 小林一郎（1977）『川端康成文学研究叢書２「詩魂の源流」』教育出版センター（166－172頁）

24 同上（169－170頁）

25 Wright, Elizabeth (1998) Psychoanalytical Criticism a Reappraisal. New York: Routledge (p.22)

26 川端康成（1980）『川端康成全集一巻』、「母国語の祈祷」新潮社（223－224頁）

27 フロイト『フロイト著作集第３巻』人文書院（221頁）

28 川端康成（1980）『川端康成全集一巻』、「母国語の祈祷」新潮社（224頁）

29 武田勝彦（1971）『川端文学と聖書』教育センター

30 フロイトＳ．(1968)『フロイト著作集２』、「夢判断」、人文書院（105頁）

31 川端康成（1980)『川端康成全集一巻』、「母国語の祈祷」新潮社（224頁）

32 川端康成（1980)『川端康成全集第十八巻』、「眠れる美女」新潮社（223頁）